

The Last of
The Kampfgruppe VIII

ラスト・オブ・
カンフグループ

VIII



高橋慶史

Takahashi Yoshifumi

大日本絵画

Dainippon Kaiga



栄誉ある“ビッグワン”を冠せられた第1装甲列車。しかしながらその火力は貧弱で、当初は防盾付き2cm高射砲1門、オランダ製函獲4.7cm砲1門を搭載した無蓋貨車2両がすべてであった。最後尾にポーランド製函獲ドライジーネ（装甲トロッコ）を連結増強しているところが涙ぐましい。



第3装甲列車も最初は貧弱な武装であったが、1940年春から夏にかけて強力なライメタル社製試作40.8口径7.5cmカノン砲搭載の火砲車両2両が増強された。オープントップ式の砲塔は十角形で独特な形をしている。なお、このカノン砲を搭載したハーフトラック式の試作自走砲が数両製作されている。

1 戦時応急鉄道装甲列車1942年型(BP42)の開発

1942年までに開発されたドイツ軍の鉄道装甲列車(Pz: Eisenbahn Panzerzug)は、ドイツ製の鉄道保安列車の改修型やポーランド製あるいはチェコ製の鹵獲装甲列車、それに対ソ戦用に緊急に開発した簡易型「装甲列車1941」などであった。これらの装甲列車はPz11、Pz7、Pz9、Pz11、Pz21、Pz31までの装甲列車番号が冠せられ、そのほかに線区保安列車「シュテッティン」と「ブリュッヒャー」を改修・改称したPz51およびPz52が在籍していた。これらの装甲列車は、初期の戦訓でいずれも防御力が弱く上に攻撃力も不十分であることが判明しており、搭載歩兵数や小火器の強化、列車からの分遣部隊の戦闘力向上、強力な

火砲や高射砲の搭載などの改善が急務であった。

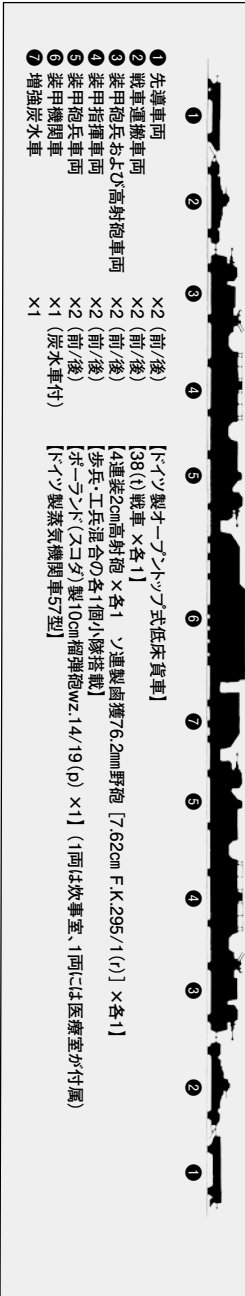
このため、以下の強化策を盛り込んだ新たな装甲列車が開発されることとなり、1942年1月にヴロツワフ(ブレスラウ)のリンケ・ホフマン社に開発が委託され、これは戦時応急鉄道装甲列車1942年型(BP42)と称された。

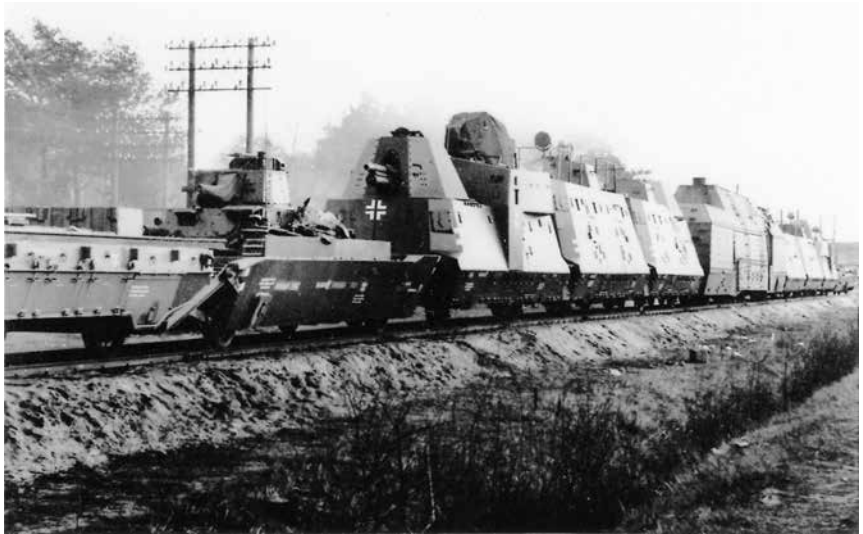
▼BP42の改善事項

- ・機関銃、手榴弾などの武装強化
- ・38(t)戦車2両を標準搭載
- ・搭載工兵部隊が火焰放射器や爆薬など携行
- ・ソ連製鹵獲76・2mm野砲2門を装備
- ・ポーランド(スコダ)製鹵獲10cm榴弾砲14/19(p)型2門を装備
- ・4連装2cm高射砲2門を装備

編成図1-1 BP42の構成と搭載兵装

戦時応急鉄道装甲列車1942年型(BP42)





ドイツ軍が大火力、防御力、指揮通信能力を有する近代的な装甲列車を持つのは、BP42の一番列車である第61装甲列車が配備された1942年12月23日以降のことであった。写真は1942 / '43年の冬に撮影された最新鋭の第61装甲列車の勇姿。



BP44とBP42の大きな相違点は、ドイツ製10.5cm軽榴弾砲の採用とIV号戦車（長砲身型）砲塔を搭載した装甲砲兵車両などの増強である。BP44の見慣れた写真であるが、撮影時期は1944年春と思われる。

この戦訓を取り入れた新しい装甲列車BP42の登場により、ドイツ製装甲列車の戦闘能力は飛躍的に向上した。しかしながら重量が増加したため、装甲については対SmK（硬質弾芯付き小銃弾）仕様の30mm厚で我慢しなければならなかった。

BP42の製造は突貫工事で行なわれ、第一次量産BP42（Pz61/Pz66）は1942年12月から翌年7月までに部隊配置が完了した。第二次量産BP42（Pz67/Pz72）は資材不足で生産が遅れたが、それでも1943年12月までに部隊配置が行なわれた。

そして、1944年以降に製造する装甲列車は、さらに改良された戦時応急鉄道装甲列車1944年型（BP44）が採用され、Pz73/Pz82までが終戦までに完成して戦闘に投入された。しかしPz83とPz84については、1945年2月に、戦況悪化に伴って製造中止となっている。（*1）

なお、その由来によりBP42およびBP44のいずれにも属さない準BP42仕様の装甲列車が1両（1編成）だけ存在するが、それが今回の主人公である第32装甲列車（Pz32）である。

2 西部戦線の装甲列車

フランスでは1941年4月からポーランド製鹵獲装甲列車由来の第21装甲列車（Pz21）と第22装甲列車（Pz22）

が鉄道の治安維持と保安任務を担っていた。

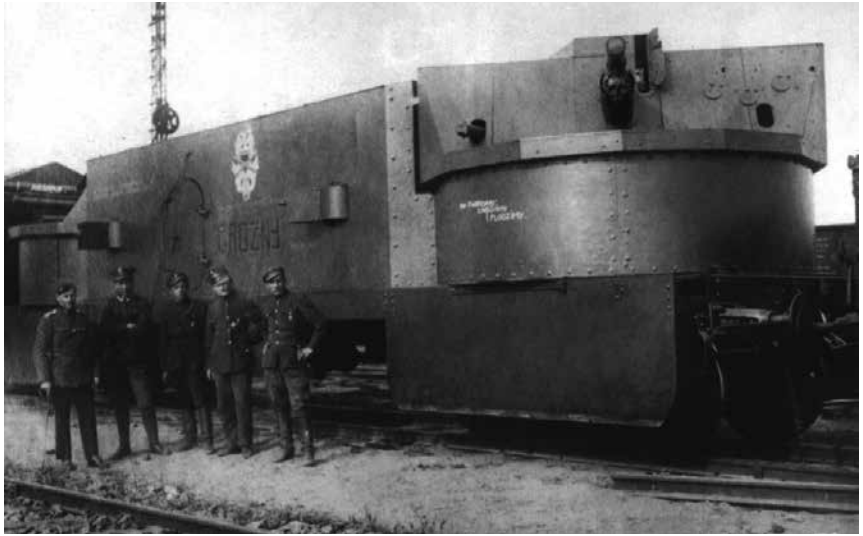
1942年10月末にPz21が東部戦線に抽出されると、その代替として改造強化されて軍務に復帰したばかりのチェコ製鹵獲装甲列車由来の第25装甲列車（Pz25）が配属された。このPz22とPz25のコンビは、以後長きにわたって1944年までフランスを含めた広大な西部ヨーロッパ鉄道線区の治安維持任務を地道に行なっていくことになるのである。

その後、ノルマンディー上陸作戦後の1944年7月10日には新鋭の第32装甲列車（Pz32）が配置され、さらにイタリアへ投入されていた第24装甲列車（Pz24）がフランスへと移動して増強された。なお、このほかにも、線区保安列車や保安補助列車等の簡易装甲列車についても数多くが投入されている。（*2）

（1）第22装甲列車（Pz22）

Pz22の前身はポーランド戦役で無傷で鹵獲された第54装甲列車「グロズヌイ（Groźny）」である。

この列車の原型は1919年8月に就役した第22装甲列車「グロズヌイ・シエロキ」であり、1919年と20年に勃発したポーランド・ソ連戦役の際、1919年7月にポーランド軍がキーヴェルツィで鹵獲したソ連軍装甲列車の車両や資材を使用して製造されたもので、事実上ソ連製の装甲列車であった。



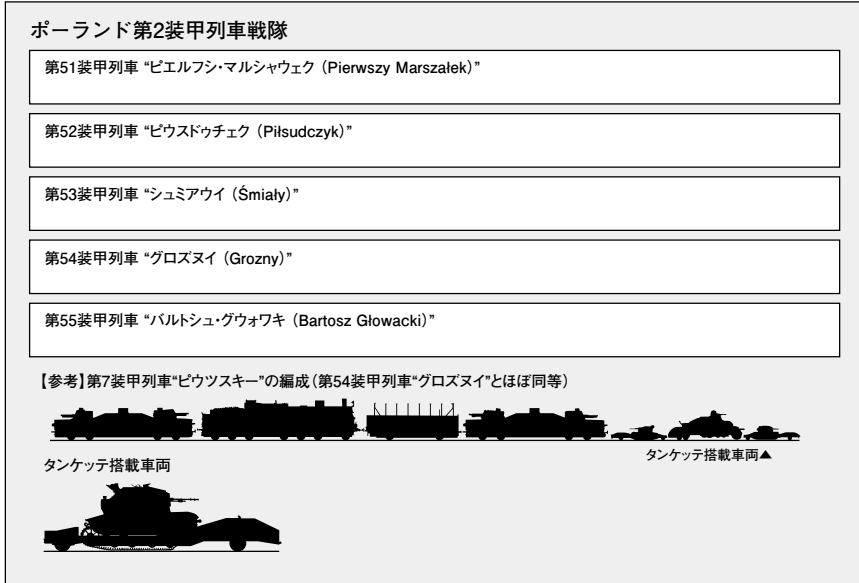
1920年夏頃に撮影されたと推察される“グロズヌイ”。まだ近代化改修前でオリジナルのオープントップ式ソ連製76.2mm砲のままである。列車側面にはマーキングとその下に“Grozny”の称号が確認できる。砲塔下部のポーランド語は「我々は創造、殺略、繁栄する」と読める。

この装甲列車の装甲砲兵車両2両については当初オープントップ式であったが、1920年3月17日にオレフスクで鹵獲されたソ連第56装甲列車“コミュニナル”の76・2mm野砲搭載のツイン（連装）砲塔型装甲砲兵車両1両、1920年8月12日に鹵獲されたソ連第104装甲列車“イミニャ・カリラ・リープクネヒタ”の76・2mm野砲搭載単砲塔型装甲砲兵車両1両にリプレースされた。さらに1920年10月以降には76・2mm野砲搭載単装砲塔型はツイン砲塔型の装甲砲兵車両へ変更され、76・2mm野砲3門から4門へと火力強化が行なわれた。

その後、1923年から1924年にかけて近代化改修が行なわれ、さらに1929年から1930年代にかけては標準化改修により、ポーランド製資機材へのリプレースが行なわれた。この結果、蒸気機関車はポーランド製Ti3型、兵装もポーランド製10cm榴弾砲wz・14/19（p）型1門、7・5cm軽野砲wz・02/26（p）型3門、wz・08重機関銃などに置き換えられてソ連製火器は一掃された。また、対空機関銃、無線装置などの通信設備が追加され、当時としては強力な火力を有する優秀な装甲列車に生まれ変わった。（*3）

そして、1930年代後半になると現役から退いて、ストックヤードに予備役として保管されていたが、ドイツとの緊張が高まった1939年8月に軍務に復帰し、第54装甲列車

編成図1-2 ポーランド第2装甲列車戦隊の編成(1939年8月)



車「グロズヌイ」として第2装甲列車戦隊の一部を構成した。

(*4)

第2装甲列車戦隊の戦闘序列を編成図1-2に示す。

1939年9月1日、ドイツのポーランド侵攻作戦が発起されると、「グロズヌイ」はオジェシエ付近でドイツ第3歩兵師団と最初の戦闘を行なった。さらにポーランド第23歩兵師団/第73歩兵連隊/第II大隊を掩護して、コピウルにおいてドイツ第23歩兵師団を迎撃した。

翌日、戦闘は激化した。指揮官のリップチンスキー大尉は積載されたタンケット(TK-3)に乗車して偵察中に戦死を遂げ、代わってクレサ大尉が指揮官となった。

戦闘が三日目になると、ポーランド軍はシュツアコバまで撤退し、9月4日には「グロズヌイ」は戦闘集団「ヤグミン」の側面掩護を行なって砲撃戦を展開し、この戦闘で炭水車が命中弾を受けた。また、トゥネル駅付近でドイツ軍自動車化部隊と交戦し、その後、霧のなかで停車中のポーランド軍側のタンケット「ドライジーネ(TK-3を鉄道軌道走行用に改装した装甲トロッコ)」と衝突して損壊したとする記録もある。

翌日、「グロズヌイ」のタンケットは偵察任務中、ドイツ第27歩兵師団の工兵部隊と遭遇してこれと交戦。午後にはクラクフへ移動して砲兵部隊と合流した。



“ピウスドゥチェク”と“シュミアウイ”の原型は、1918年11月にクラクフ近郊で鹵獲されたオーストリア・ハンガリー帝国軍の装甲列車である。この写真は前者のもので撮影時期・場所ともに不明であるが、特徴的な装甲砲兵車両と“ピウスドゥチェク”の称号とマーキングが確認できる。



1942年に西フランス方面で撮影されたPz22の貴重な写真。手前が装甲砲兵車両、後方が装甲歩兵車両である。ご覧のとおりポーランド製の7.5cm軽野砲wz.02/26 (p)へ換装されており、砲塔もカーゼマツ方式を採用し強化されている（注：中央の黒い斑点はオリジナル写真の汚れである）。

9月7日になると、「グロズヌイ」は東方のタルヌフへ後退しようとしたが、途中のドウナイエツ河に架かる橋が爆破されていることが判明した。ドイツ第2戦車師団の先鋒が迫るなか、クレサ大尉はビヤドリニ・シュラヘツキエ駅で「グロズヌイ」を放棄するよう下令し、乗員は爆薬で機関車を損傷させ、搭載機関銃を取り外して列車から離れた。

乗員はその後、一部は前日に渡河できた第51装甲列車「ピエルフシ・マルシャウエク」と合流してミエレット方面へ脱出する一方で、ほかの乗員は作戦集団「ポレシエ」に收容されて歩兵として戦闘を継続した。（*5）

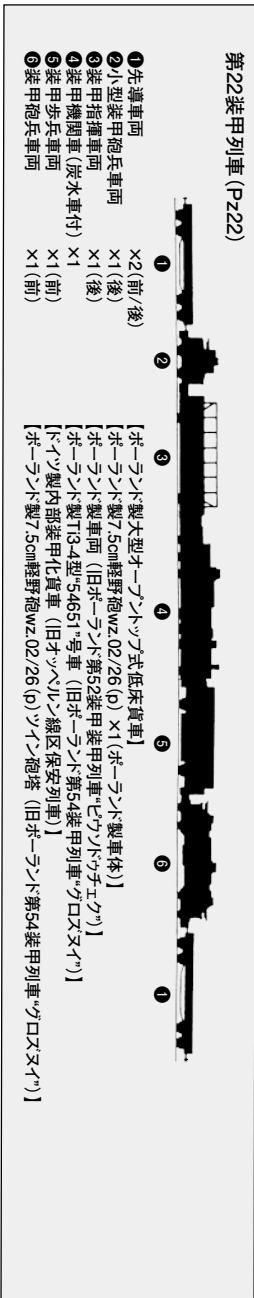
「グロズヌイ」を鹵獲したドイツ軍は、損傷が軽度なことから修復してドイツ装甲列車として再使用することを決定した。これは貧弱な装甲列車しか装備していなかったドイツ軍に

とって、垂涎ものであったに違いない。

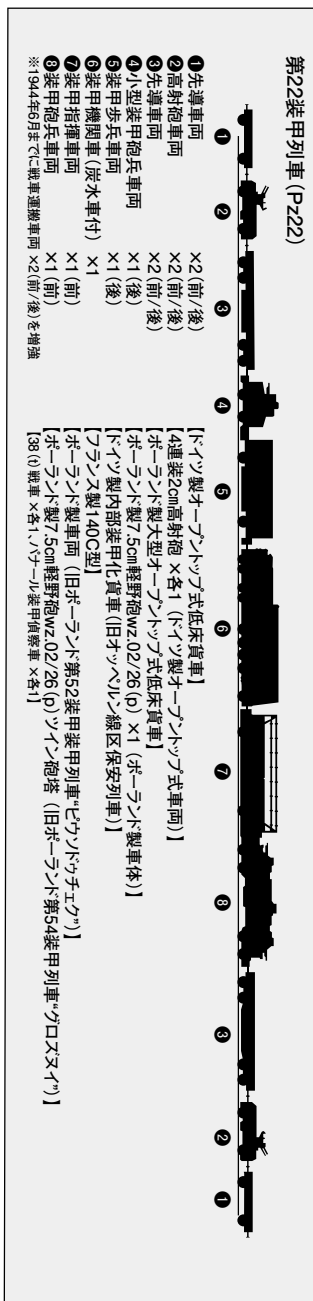
「グロズヌイ」の火力車両と装甲機関車を用いて新編成された装甲列車は、第22装甲列車（Pz22）と呼称されて1940年7月10日に部隊配属が行なわれた。もともと、ドイツ製オリジナルの車両は少なく、装甲歩兵車両のみがドイツ製で、残りはすべてポーランド製車両が占めていた。編成図1-3にPz22の構成と搭載兵装の内訳を示す。

その後、Pz22は1941年にフランスのル・クルーズにあるシュナイダー社工場にてオーバーホールが行なわれ、装甲強化とドイツ製のオーブントップ式低床貨車に2cm高射砲を搭載した装甲高射砲車両2両が追加された。さらに1944年初めまでに装甲機関車はフランス製140C型に交換され、無線設備が追加。単砲身2cm高射砲は4連装2cm高射砲

編成図1-3 第22装甲列車（Pz22）の構成と搭載兵装（1940年7月当時）



編成図1-4 第22装甲列車(Pz22)の構成と搭載兵装(1944年当時)



へと換装されて、高射砲車両の装甲も強化された。また、戦車運搬車両2両が追加され、38(t)戦車1両とパナール装甲偵察車1両が積載された。

1944年当初のPz22の構成は編成図1-4のとおりである。(※6)

(2) 第25装甲列車(Pz25)

1939年3月にチェコを併合したドイツは、プラハ近郊のミロヴィツェにおいて、装甲列車用として大量の資材を取得することができた。これは戦闘用装甲列車5両(編成)分と訓練用装甲列車1両(編成)分であり、ドイツ軍を大いに喜ばせた。

この資材を使って装甲列車3両がハルバーシュタットの工

場で組み立てられ、第23装甲列車(Pz23)と第25装甲列車(Pz25)と命名され、1940年3月に部隊配属された。Pz25の構成は編成図1-5(16ページ)に示すようなものであり、当時の貧弱なドイツ製装甲列車と比較すると火力は優秀であったが、ニッケル鋼板とはいえ装甲厚が僅か8mmしかなく、さらにチェコ製蒸気機関車は小型で防御力と走行性に不安を残していた。

なお、主砲のチェコ製7.5cm山砲vz28は、ユーゴスラヴィア軍用に製造輸出していた山砲であり、スコダ野砲D28の通称を持つ小型軽量の優秀な火砲であった。

ここで面白いことに、Pz23とPz25は1940年8月の段階で除籍されて、ケーニヒスベルク(現カリニングレー



9784499233477

ISBN978-4-499-23347-7

C0076 ¥4500E



1920076045004

定価 (本体 4,500 円+税)



The Last of The Kampfgruppe VIII